

疫病除けのシンボルである猩々とオランウータンが結びつき、疫病除けのメッセージを伝えるアマビエになり、さらにアマビエにならぬものではないか。あくまでこれの背中におぶつては推論の一つで確証はないのだが。県外への移動が緩和されたら、オランウータンの檻をのぞいて、アマビエと重ねて見るのも面白いかもしれない。

ゲッター・ショーン
@GetterShown

いやまたオランウータンなら江戸時代に来日してゐる蘭咲摘芳「阿郎惡鳥當（オランオウタン）」寛政4年（1792）および同12年（1800）渡來のオランウータンについての記述があるが、「阿郎烏鳥當寫眞図」は寛政12年に長崎にやってきた個体を描いたもの

图5 ゲッター・ショーン @GetterShown さんが「阿郎烏鳥當寫眞図」の画像と共に、2020年8月18日にTwitterに投稿しアマビエのルーツを考察した。



图6『猩々』のイメージイラスト

いたもの。ゲッター・ショーンさんは諸説の域を出ないとしているが、この姿、アマビコに似てはないだろうか。我々はオランウータンを知っているので、地面に長い手を置いた前かがみのポーズだとわかるが、当時現物を見た絵師以外の人は、この絵でしか知らない。左腕と足がたまたま構図的にかぶっているのが、わからぬ人には三本足に見える。最初の絵は結構詳細に描いていたが、あまり絵が得意じやない人が描き写しているうちに、伝言ゲームみたいに崩れてあやふやになつて、アマビコの姿になつたのではないか。先ほどの図3なんかは、「毛むくじやらで三本足だつた」という情報だけ与えられた。オランウータンの別名を「猩々（しようじよう）」といふのだという。

そう仮定するとして、外来の猿の絵姿がなぜ多くの人の手で描き写されていったのか。オランウ

ー病気そのものにもピントを合

わせてみたい。奈良国立博物館所蔵の十二世紀の絵画『辟邪絵（へきじやえ）』では、天刑星とい

う神様が、手づかみで疫鬼を食

べている様子が描かれている。病

氣（鬼）と考えられていた。十五

世紀の『融通念仏絵巻』では、人々

の仏への信心深さが疫鬼を退散

させ、悪さはしないと念書を書

かせるストーリーになつていて。

黒木 とてもユーモラス。神様は

悪鬼を食べて「倒す」けれど、

人間には倒せない。お願いし約

束してもらうしかない。もしか

り、それが日本人に根付いて

いる疫病との付き合い方かもし

れない。討伐するのではなく、

説得して帰つてもらう。疫鬼も

念書にサインするなんて儀儀で

真面目（笑）。

一かたやヨーロッパはどうだつた

か。十四世紀に大流行し、当時のヨーロッパの人口を三分の一まで

激減させたといわれる黒死病、

ペストにまつわる民間伝承を紹介する。

黒木 とてもユーモラス。神様は

悪鬼を食べて「倒す」けれど、

人間には倒せない。お願いし約

束してもらうしかない。もしか

り、それが日本人に根付いて

いる疫病との付き合い方かもし

れない。討伐するのではなく、

説得して帰つてもらう。疫鬼も

念書にサインするなんて儀儀で

真面目（笑）。

一かたやヨーロッパはどうだつた

か。十四世紀に大流行し、当時のヨーロッパの人口を三分の一まで

激減させたといわれる黒死病、

ペストにまつわる民間伝承を紹介する。

黒木 得体が知れない状態だと

黒木 人間の骨格がそのまま現れる。さらに調べを進めたところ、南方熊楠が著書『十二支考』の中で、中国でも日本でも

はできない。親切で馬鹿正直な男の背中におぶつてもららしかった。ある晩一人の老人が、川のほとりでペストに出会った。彼女（ペスト）はランヌールの住人を根こそぎにしました後、ラニオン地方に行くところだつた。ペストは老人に、川を渡りたいので肩車をしてくれと頼む。老人は女の正体を知らなかつたので、二つ返事で引き受けたが、進めば進むほど女は重くなり、川の中程で精根尽き果ててしまつた。「悪いがここで降ろさせてくれ」と老人が音を上げると、女は「殺生な！ならさつきところまで戻つておくれ」と言う。戻るにつれ、女は軽くなつたので、帰りは造作もなかつた。こうしてラニオン地方はペストの災いか逃れたのだった。だが、もし老人が女を川の真ん中で落としたら死んだのだった。だが、もししてたら、ペストは金輪際この世からいなくなつたのだが。

黒木 「罰だ」と諭して聖職者も死ぬ。身分も貧富もなく、亡くなり、疫病は天罰とも言つていられなくなつた。

まなびあサン vol.3

by 金田つけもも



編集後記

経験した事のない事態の中、距離を保ちながら開催した第三夜「疫病と信仰」。先祖の暮らしがいかに疫病と信仰と共にあつたか。当時の人々の心のありようについて、調べれば調べる程、失われかけていた点と点が繋がり、さらに深く多くの事を知ることができました。一方、玩具に疱瘡除けを託した江戸時代の人々と、可愛らしい妖怪を疫病退散のシンボルに祭り上げ、何とか明るく乗り切ろうとする令和の我々の、根本的な「変わらなさ」に可笑しみを感じる会でもありました。それらを瓦版でも再現したく、より一層編集に力を込めました。楽しんでいただけたら幸いです。

まなびあ
テラス

第3号 2021年3月13日発行

発行：
東根市公益文化施設 まなびあテラス
〒999-3730

山形県東根市中央南1丁目7-3
TEL：0237-53-0223（代表）
FAX：0237-42-1296

HP：http://www.manabiaterrace.jp
E-mail：info@manabiaterrace.jp
編集：まなびあテラス市民活動支援センター
スタッフ（高橋・天野）

執筆協力：黒木あるじ
デザイン：土澤潮（デザイン事務所ペイジ）

山 形県高畠町の「おつかな橋」にはこんな伝承がある。弥三郎という侍が、諸国武者修行からの帰り、この橋の上で鬼婆が率いる狼の群れに襲われる。鬼婆の片腕を切り落として撃退し、無事に家に帰り着くも、母親が寝込んでいる。先ほどの出来事を語り、切り落とした腕を見せて、布団の中から鬼と化した母親が現れ、腕を奪つて逃げ去つた。実は弥三郎が旅立った後、嫁と孫が相次いで病死し、母親は嘆きのあまり鬼に変じて人々を襲っていたのだ。切り落とした腕を見せられ己の浅ましさを恥じた母親は、新潟の弥彦山

形県高畠町の「おつかな橋」にはこんな伝承がある。弥三郎という侍が、諸国武者修行からの帰り、この橋の上で鬼婆が率いる狼の群れに襲われる。鬼婆の片腕を切り落として撃退し、無事に家に帰り着くも、母親が寝込んでいる。先ほどの出来事を語り、切り落とした腕を見せて、布団の中から鬼と化した母親が現れ、腕を奪つて逃げ去つた。実は弥三郎が旅立った後、嫁と孫が相次いで病死し、母親は嘆きのあまり鬼に変じて人々を襲っていたのだ。切り落とした腕を見せられ己の浅ましさを恥じた母親は、新潟の弥彦山

百物語に寄せて

— 黒木あるじコラム —



に行き、妙多羅天という神様になつたという。妙多羅天堂は高畠にもあり、諸病平癒の神として祀られている。これは日本各地に伝承される「千匹狼」という昔話の類型の一つであり、「弥三郎婆」と呼ばれる。弥三郎婆自体も多く異なるが、狼を眷属とし使役する姿には、日本どころか、古代、製鉄と共に中央アジアから世界中に伝播した、狼信仰が息づいていると考えられる。

同じく高畠町には「犬の宮」と

「猫の宮」がある。今ではペット供養として有名になつていて、元々は人身御供を要求する化物と戦って命を落とした犬と猫を祀つている。この犬は、狼の血統

とされるが、その点にこそ因縁が潜んでいる。天童市に伝わる

とんべこ太郎という犬の話もほぼ同じで、妙見神社にその墓が祀

られている。実は、北極星また

は北斗七星を神格化した妙見

信仰（北辰信仰）と狼信仰には密接な関係があり、犬の宮の近

くにある亀岡文殊の星祭りも

北辰信仰に由来するものだ。点

と点を結びつけると線になる。点

と点を結びつけると線になる。点